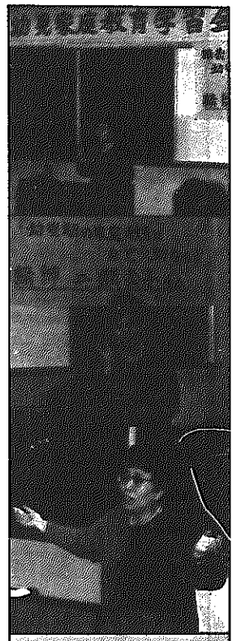
小林地区・幼児家庭教育学習①

いい・悪い　快い・苦しい

理屈でしかるのではなく情的に伝える

『幼児期の家庭教育はなぜ大切なのか』二瓶公子さんの講義から

小林地区では現在、地区公民館と小林保育園母の会が一体となり、「幼児家庭教育学習」に取り組んでいます。学習は①子供の心を理解すると同時に、親のあり方について学習し、子供とともに親も成長する　②学習を通して仲間づくりをする　③親として、人間として成長しながら、その力を地域に還元する――を目標にし、母の会では会員90人を対象に11月まで7回の学習計画を立てています。5月29日にはその第1回目が開かれ、開級式の後、社会教育講師の二瓶公子さんから講義を受け、子育てについて参加者全員で話し合いました。さて、「三つ子の魂百まで」ということわざがありますが、なぜ3歳までの教育が大事なのでしょうか。今回は二瓶さんの講義を要約して紹介します。なお、これと並行して白根地区でも、地区公民館と四ツ興野保育園母の会で、学習が進められています。



二瓶公子さん
元小学校教諭。現在は社会教育講師として県内各地で活躍。特に「家庭教育」について熱心な講演活動を続けている。新潟市在住

3歳までに65%出来上がる脳の旧皮質

赤ちゃんに話しかけても返事なんかしないわけです。まだね。でも「きれいなお空だねえ」なんて、昔の人はよーく話しかけてますよね。いつでも。

赤ちゃんの脳というのは、おなかの中にいるときから、ずいぶん成長してるんだそうですが、この中の旧皮質というのは二百四十億もの脳細胞があり、その一本一本がまだ、五十本もの伸びきったヒゲになっているというんですね。この旧皮質が、生まれてから三歳までの間に約六五%出来上がるそうです。それから六、七歳までで八五%。九歳くらいまでで九五%。そして二十歳になるともう一〇〇%出来上がるっていうんですね。

すでに赤ちゃんはあなたを見ている

この旧皮質はどんな状態かというと、カメラ。ほら、写真を撮るとき、カメラのシャッターをカシャッと一瞬開けるでしょ。ところが、この部分はいつでもシャッターが開きっ放しの状態だというんです。だから、どんなときでもみんなそれが刺激になって、無数のヒゲがからまってくるそうなんです。目が開いてても見えるんだか見えないんだか。耳もどうかなーなんて思っていてもね。みんなこの脳は刺激を受けてね。からまってる。

「あー〇〇ちゃん、いい子だね。オッパイたくさん飲んで大きくおりこうに育ってね」なんてニコニコと声をかけながら、しっかりと抱きしめて育てるお母さん。「ほら、忙しいんだからさっさと飲め」なんていう気持ちでオッパイをあげるお母さん。いつでもブツブツと言ってるお母さん――自分にすれば何気ない毎日の会話であり、しぐさにすぎなかったのかもしれません。でも、その間も、脳細胞のからまりは一刻一刻出来てるんです。

からまりぐあいが豊かになるか、それとも粗雑になるか。どういう家庭環境で育ったかで決まってくるんですね。この旧皮質が基になって、思考力、創造力、自制心などをつかさどる新皮質がだんだんと出来てきます。

心はいったいどこにある

心はどこにあると思いますか。私たちは人と人、人と物、または人と自然の関係、〝ふれあい〟の中で毎日生きています。心というのはこの〝ふれあい〟のときに、こつ然として出てくるんですよ。

例えば、お子さんと二人で歩いていて「お母さん、あそこにきれいなお花が咲いてる」なんて子供が言ったとします。これは情緒です。「花なんか見てないで早く帰ろう」などというお母さんは、花を大切にする心を子供に植え付けられはしないでしょう。人と物、人と自然ね。子供が触れて、ふっとお母さんに投げかけた言葉をどう受け止め、どう返してあげるかが非常に大事なんですよね。

心というものは形にはありませんが、知的な働き、情的な働き、意志。こういうものになって現れてきます。このうち幼児期の家庭教育の中で非常に大事なのは、情的な働きです。だから子供がけんかに負けて「悔しい」って言いながら帰ってきたら、「まあー、それは悔しかったでしょうねえ」と、悔しいという情感をそのまま、まず受け入れることです。

「なになに時代」に豊かな感性を育てる

二歳、三歳になってきますと「あれなあに、これなあに」って聞いてきますよね。そんな時期には情的に答えてやる必要があります。情的にっていうのは、その物にあたかも命があるようなね。温かいふれあい。温かく感じ取れるような受け答えなんですよね。

「あれなあに」って聞いてきたら、単に「猫だよ」と答えずに「あれは猫さんだよ。ニャーオ、ニャーオってね。ねずみさんを取るんだって」というふうに。骨だけガツンとやるんじゃなくて、温かくくるんで返すのが大事なんです。この情的なものを大事にしていくと、学校へ通うようになってから知的なものがどんどん育ってくるんです。

それなのに、幼児期に「まだ字が覚えられない」と、ピシャッとひっぱたいてみたり、隣の子と比べたり。字なんかまだ覚えなくてもいいんです。それよりも、もっと物に驚く豊かな感性を育てておくことが大事です。そうすれば、学校へ通い始めると知らず知らずのうちに知的なものを要求し、特に高学年になると自らどんどん勉強していく子になるんですね。

「なぜ」には情的に。物は生きている

「なあに」の次に「なぜ、どうして」っていう時期がありますね。例えば「お月さんは僕がお母さんと買物に行くときいつもついてくるぞ。どうして」と聞かれますとね。たいていの人は知的に答えなきゃと思うんです。理論的にね。

「月…月…。なんて答えたらいいだろう。困ったなあ」。知的に答えようとすると。ほんとうにどうしようかと思うんですよね。でも情的に答えるんですから「お月さまはね。ボクが買物に行くときころばないようにって、ついてきて明るく照らしてくれてるんだよ」。こんな言葉が使えたら、なんにも難しくない。頭も使わないですみます。

このころは、たとえ相手がおもちゃでも本でも、物自体が生きていると思える時期なんです。すべての物に心がある。だから遊び終わったときは「遊んでもらってよかったねえ。お人形さんもほら、ネンネしたいってさ」などと情的に訴えながらしつけておけば、小学生になっても物を大事にし、「ほらっ、かたづけなさい」などと厳しく言わなくても、きちんと自分でかたづける子になります。

「いけない」としからずに感じさせる

しかるときにも快いこと、苦しいこと。感情をそのまま子供に伝える。例えば、よそのおじさんが大事にしている花を子供が折ったとき、「おじさんに叱られたらどうするの！」というふれ方は効果がありません。「あー、せっかく咲いたお花さんがね。首をチョキンとされて痛かっただろうなー。かわいそうだね」と悲しそうな顔をすると、子供に「いけないことなんだな」ということが情的に伝わっていきます。

家庭は〝あったかい〟

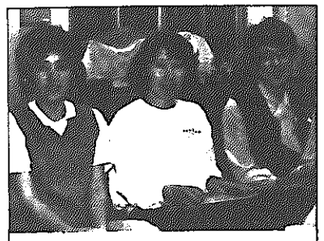
要は、物と子供の関係が、ふれあいが温かく受け取れるような言葉を返していただければいいんです。でも、これはできそうで、なかなかできません。

今まで理論的に「こうしなさい、ああしなさい」「こうあるべきだ、あああるべきだ」なんて、「べきだ、べきだ」なんかは家庭ではいらないんです。そりゃあ一般社会に出れば、いろいろな評価があるでしょう。ところが家庭に戻っても評価されたら、だんなさんでも子供でも家庭がいやになります。

外でいやな事があっても、お母さんの顔を見ると吹き飛んでしまうというようなね。そういうふうに自分自身を高めるために子育てをしてるんだし、お勤めをしてるんだし、結婚をしてるんですよ。ですからね。なんでも自分の成長に役立つんだという目で、周りを温かく見ていってほしいと思うんですね。

「育てる」とは「育てられる」こと

子育てをするからこそ子供の気持ちがわかり、自分を育ててくれた親の気持ちもわかるんです。だから子供を育てるということは、自分が育てられてるんだと。いつもそういうふうに、お互い持ちつ持たれつだという考え方でいられたら、ほんとうに豊かな毎日を送れるんではないでしょうか。皆さんが自分を見つめながら努力していれば、子供がその姿を見てちゃあんとよく育っていきますよ。



会長の山岸フミ子さん（中央）と副会長の森山まり子さん（左）、同じく夏川京子さん

堅苦しく考えずに話し合いながら進めたい
―小林保育園母の会―

〝子育て〟というものをあまり堅苦しく考えないで、いろんな人の意見を聞いたりしながら学習を進めていきたいと思っています。

今までこういった学習の形としては、講義を聞いたらそのまま解散というのが常でした。でも、ただ聞いて終わるのでは学習を実のあるものにすることはできません。

今回、先生のお話しの後に、感想など話し合いの時間を設けましたが、皆さん、意見を活発に出してくれました。それによって、「あの人はこうしてる」などと、同じ立場の人の実際の子育て法や考え方を聞けましたし、学習の運営について反省させられることもありました。

今日の講義は好評だったようですし、今後の学習も期待できます。とにかく、せっかくのチャンスです。次回以降はもっとおおぜいの人に出席してもらって、子供の教育に対する気持ちを新たにして子育てを行ってもらいたいと思います。そして、子供とともに親も成長していけたらいいですね。

話し合い

講義の後、班に分かれて三十分ほど、感想や子育てについて話し合ったことを簡単にまとめたものです。

▼子供との接し方

●受け答えが完全にできず、悩むことがある　●小さくても一人の人間。親が対等に子供とつきあい、会話をしてやるようにする　●一人の子供だけをかわいがらず、平等に取り扱う　●子供をしかるときや接するとき感情をもって行う。●子供どうしのけんかは、むやみにやめさせないよう努力する　●テレビにラブシーンが出てきたときは、さりげなく自然にそのままにしておいてもいいのではないか　●一人っ子はわがままになってしまう傾向があるので、親と分け合って食べるとか工夫する必要がある　●親がいると甘える。いなければ子供どうしでけっこう仲よくやっているようだ　●子供にも、利害関係で人（家族）を見ている部分がある（例えば「じいちゃんは車に乗せてくれるから好きだ」とか）

▼しかり方

●今まであまり深く考えないでいたが、しかる前にもっと考えてみようと思う　●母親がしかったら父親が逃げ道をつくってやるとかの配慮をしてはどうか　●子供でも、むやみにしかると自尊心を傷つけられると思う　●男の子はやはり男らしく育ってほしいので、構えてしかることがある　●しかる前に子供の身になって考えて情をもって接する

▼祖父母との関係

●しからなくてもよいときでも、祖父母のてまえ、しかってしまうことがある　●祖父母のための講演会（学習の第六回目に計画）のときに孫のしかり方・接し方を勉強してほしい　●お年寄りがいると、幼児環境としてほのぼのとしたやさしい感情が育てられるようだ　●おばあちゃんといつもいっしょにいるから、すぐにおばあちゃんに甘えてしまう

▼父親の役割

●しかるときはやはりお父さんの方が威厳がある　●お父さんがちょっと忙しいと、お母さんが「お父さん」的役割をしてしまうときがある　●夫婦が仲よくしていると、子供はうれしい　●子供のしつけについて夫婦でよく話し合う

▼学習方法

●講義を聞いた後、このように話し合いをすることはよいことだと思う　●感想を聞かれると、かえって困ってしまい、次の講義を聞きたくなくなる　●先生を囲んで、リラックスして気軽に〝ふれあい〟の場を持ったらよいのではないか。細かい点まで相談したいこともある

▼講義の感想

●しかり方の勉強になったが、実際にうまくいくかどうか疑問である　●もっと早く、子供が小さかったときに聞きたかった　●先生が話されたことを実行したいと思うけれど、日々の生活の中ではなかなか難しい　●おおぜいの人の前で質問されると緊張し、また、内情を人に知らせるようで少し困ってしまう